

トガクシソウ – 日本人によって最初に名付けられた学名をもつ植物

Ranzania japonica – the scientific name firstly named by Japanese botanist

中村 千賀 (NAKAMURA Chika)

トガクシソウ (学名 *Ranzania japonica* (T. Ito ex. Maxim.) T. Ito) (図1) はメギ科の多年生草本であり、一属一種の日本固有種である。分布域は本州の青森県から長野県までの日本海側の多雪地帯で、主にブナ林中の沢沿いの傾斜地に生育することが知られている (荒川 1976)。春、雪解けとともに地面から芽を出し、茎が伸びるのと同時に花を咲かせ始める。つまり、展葉しきる前に開花をするという特徴をもつ。葉は三出複葉で茎の上端から2枚が近接して互生する。小葉は楕円形で3~4回中裂する。花茎を2枚の葉の付け根から数本伸ばし、それぞれに1つずつ花をつける。花は直径約2cmで、淡紫色の花弁と内萼片が6枚ずつ、早落性の外萼片が3枚、雄蕊が6本、雌蕊が1本で構成されている。内萼片が大きくあたかも花弁のように見える。



図1. トガクシソウ

花後、初夏に直径3cmほどの白い楕円形の液果をつける。中には長径約3mmの種子が10~30粒ほど入っている。観察の結果、液果は鳥に食べられ散布されることが、また種子にはエライオソーム (種枕) がついており、アリ類によって散布されることが知られている (井上 1994)。

次に伊藤篤太郎 (1866~1941) による、トガクシソウの学名命名のいきさつと「破門草事件」について述べる。この内容は主に岩津都希雄氏の「伊藤篤太郎 – 初めて植物学名を与えた日本人」(八坂書房 2016) に依っている。

トガクシソウの学名命名のもとになったタイプ標本は、篤太郎の叔父、伊藤謙 (ゆずる) (1852~1879) によって戸隠山で採集されている。謙は江戸末期から明治にかけて活躍した名古屋出身の本草学者・植物学者である伊藤圭介 (1803~1901) の三男で、圭介の跡継ぎとして期待された人物である。当時、国策として殖産興業が急がれており、地域の産物 (動植物や鉱物など) を明らかにする目的で、明治8年 (1875) に長野県内で本格的な山岳調査が行われた (橋詰 2001・田中 2009)。調査の中心となったのは、現在の長野県飯田市出身の内務省博物科長、田中芳男 (よしお) (1838~1916) である。彼は圭介の高弟の一人で、兄弟弟子にあたる謙はこの調査に同行していた。調査は、7月下旬からの約1か月間に徒歩で県内を廻り、中央アルプス空木岳、木曾御嶽、飯綱山、戸隠連峰高妻山、浅間山の五山に登るといって強行軍だった。調査が終盤になる8月9日、一行は、高妻山山頂を目指す途中、林内で白い実を結んだ未知の植物に出合った。謙はこの株を採集して、圭介の勤め先である東京の小石川植物園へ移植した。翌年に開花し、この植物の研究が進められるはずだったが、謙は胸を患い、この山岳調査から4年後に夭折してしまった。

圭介の孫である篤太郎は、謙の死もあり圭介の研究を引き継ぐため、植物学の英才教育を受けて育った。明治16年 (1883) には極東アジアの植物研究の泰斗、ロシアのマキシモヴィッチ (1827~1891)

宛に英文での手紙の他、植物標本一箱が、数え年で18歳の篤太郎によって送られている。その中に、明治8年に戸隠山で叔父の謙が採集したトガクシソウの葉の標本と、印葉図と花の解剖図を含む数点の図が含まれており、篤太郎が命名した新学名*Podophyllum japonicum*のラベルが添えられていた。この学名は、篤太郎がイギリス留学中の明治19年（1886）に、マキシモヴィッチによってロシアの学術雑誌上に正式に公表された（Maximowicz 1886）。これによって篤太郎は日本人による初の学名命名の榮譽を得ることができた。篤太郎21歳のときであった。マキシモヴィッチへ送った手紙の中で、和名を「トガクシソウ」とすることがすでに書かれており、また、国立科学博物館所蔵の重複標本の台紙にも、圭介と篤太郎によってトガクシソウと名付けられたことが記されている。実際、篤太郎は留学中の明治20年（1887）に発表した「日本産メギ科植物通覧」の中で、*Podophyllum japonicum*の和名が‘Togakushi Sō’であると公表している（Ito 1887）。なお、トガクシソウの学名命名のもとになった伊藤謙採集のタイプ標本は、現在ロシアのコマロフ植物研究所に保管されている。

一方、伊藤家とは別にトガクシソウを研究している植物学者がいた。東京大学理学部植物学教室の初代教授、矢田部良吉（1851～1899）である。彼は明治17年（1884）に助手たちと戸隠連峰高妻山に登り、やはり未知の植物としてトガクシソウを採集した。株を小石川植物園へ移植したところ（この頃すでに圭介は植物園に出入りしていなかった）、2年後に開花した。標本と研究結果をマキシモヴィッチへ送り、鑑定を仰いだ。その回答は明治21年（1888）3月づけの手紙に記されていた。そこには、新しい属をたてることと、その属名に矢田部の名を冠した*Yatabea*を提案され、またさらに詳しく研究するための材料の提供を依頼された。矢田部は和名に「トガクシショウマ」を用意していた。

この手紙の内容を知った留学帰りの篤太郎は、すぐに論文を執筆し、イギリスの植物学雑誌へ投稿した。*Journal of Botany: British and foreign*誌の1888年10月号に掲載された論文の中で、トガクシソウの新属名として、江戸時代の著名な本草学者、小野蘭山（1729～1810）の名からとった、*Ranzania* T.Itoが発表された（Ito 1888）。併せてトガクシソウの学名は*Ranzania japonica*として再発表された。

これを知った矢田部は怒り、篤太郎の東大への出入りを禁じた。当時、学術研究ができる施設は限られており、東大への出入り禁止は実質上、日本の植物学の研究界から追放されたに近い。この出来事がおきた当時、トガクシソウは「破門草」の別名がつけられ、この事件は「破門草事件」と呼ばれたという。

次に、この事件後のトガクシソウに係る出来事について述べる。矢田部は、明治24年（1891）になってトガクシソウを、学名*Yatabea japonica*、和名トガクシショウマとして、植物学雑誌第5巻55号に発表した（Yatabe 1891）。正式に受け入れられない発表であるが、矢田部が日本の植物学界の権威であることと、日本の雑誌に発表されたこともあって、国内ではこれらの名前が浸透した。特に矢田部の弟子で、現在の長野市松代出身、東京高等師範学校教授を務めた斎田功太郎（1859～1923）は、矢田部の墓碑に刻まれている彼の経歴、トガクシソウの学名が矢田部の名前からとられていることを含めて、を撰した人物であり、さらに斎田の教えを受けた、長野県諏訪市出身の矢澤米三郎（1868～1942）は、長野県師範学校の教員、後には松本女子師範学校の校長を務め、かつ信濃博物学会の会長として、長野県の自然史学研究をリードした人物である。矢田部の孫弟子にあたる矢澤によって「トガクシショウマ」の名前はトガクシソウの産地である長野県内で広められた。さらにその名を有名にしたのは、明治35年（1902）の大正天皇（当時皇太子）の長野訪問である。

前年に雑誌「少年世界」が主催した戸隠山探検（寺崎 1902）によって、明治17年の東大一行以来、初めて戸隠山でトガクシソウが再発見されたこともあり、皇太子へ長野県を代表する植物としてお見せすることになった。5月23日のご訪問を前に、5月11日に長野県師範学校の学生2人、田中貢一（1881～1965）と富岡朝太（1879～1959）が雪の残る悪天候の戸隠山に登り、トガクシソウの株を苦勞して掘り取ってきた（田中 1903, 富岡 1934）。この株を温室に移したところ、無事に開花し、皇太子へお見せ

することができた。皇太子はお喜びになり、東宮御所へ献上することになった。これを記念して、師範学校ではトガクシソウの花をかたどったバッジが作られ、全校生徒と教員に配られた。後にはそのデザインが師範学校の校章にも採用された。師範学校から長野県全体へ、トガクシソウは、学名を *Yatabea japonica*, 和名をトガクシショウマとして浸透していった。なお、この校章は昭和22年（1947）に開校した信州大学附属長野中学校の校章へ引き継がれた。また、開校10周年を記念して制定された同校の校歌（佐藤春夫作詞）の中でも「戸隠しょうま」として、現在も歌われている。

大正天皇のご訪問を機に、「トガクシショウマ」をシンボルとして信濃博物学会が設立され、師範学校を中心に活発な活動が続いた。また、トガクシソウは長野県内では戸隠山以外に初めて北アルプス白馬岳で発見されたことから、アルプス登山の案内書の表紙を飾り（矢澤・河野 1916）、明治41年（1908）に長野市内で開催された一府十県連合共進会（産業博覧会）の記念絵葉書にもシンボリックに描かれた。「トガクシショウマ」としてまさに長野県を代表する植物となったトガクシソウだが、一方で、大正天皇へ献上された翌年の明治36（1903）年には、すでに戸隠内の自生地は盗掘によって荒らされ、絶滅の危機に瀕していたという（富岡 1934）。

現在トガクシソウは、長野市の天然記念物に指定され保護されている。また、トガクシソウの株を栽培によって実生から増やし、現地の盗掘を防ぐ取り組みが、戸隠の地元の有志によって行われている（中村 2015）。トガクシソウの呼び名については、近年、伊藤篤太郎の業績が再評価されるに伴って、篤太郎が先に名づけた「トガクシソウ」を正式名称とし、矢田部が名づけたトガクシショウマを別名とする図鑑や本が増えている。トガクシソウの発見の地、戸隠においても、2015年3月に新国立公園として分離独立した「妙高戸隠連山国立公園」を代表する植物の1つに「トガクシソウ（トガクシショウマ）」として挙げられている。筆者が所属する戸隠地質化石博物館においても、トガクシソウ、トガクシショウマ、そして破門草の3つの呼び名があることの歴史的経緯について、また日本の科学史上、重要な植物であることを紹介する展示を行い、普及に努めている。

引用文献

- 荒川袈裟利（1976）トガクシソウの生態と繁殖環境について。長野県植物研究会誌，9，27-36.
- 橋詰文彦（2001）田中芳男『信州諸山採葉記』。信濃，53，106-134.
- 井上健（1994）トガクシショウマ（メギ科）の繁殖生態。長野県植物研究会誌，27，9-15.
- Ito, T. (1887) Berberidearum Japoniae conspectus. *J. Linn. Soc., Botany*, 22, 422-437.
- Ito, T. (1888) Ranzania: A new genus of Berberidaceae. *J. Botany: British and foreign*, 26, 302-303.
- 岩津都希雄（2016）伊藤篤太郎－初めて植物に学名を与えた日本人（改訂増補版），八坂書房，348p.
- 田中貢一（1903）信濃の花，荻原朝陽館，225p.
- 田中義信（2009）田中芳男自筆「科埜行雑記」－解説と翻刻－。飯田市美術博物館研究紀要，19，31-67.
- 寺崎留吉（1902）戸隠山探検学術統報。少年世界，8，55-62.
- 富岡朝太（1934）花鳥。富岡朝太，410p.
- Maximowicz C.J. (1886) Diagnoses plantarum novarum asiaticarum. VI. – Insunt stirpes quaedam nuper in Japonia detectae. *Mélanges Biologiques tirés du Bulletin de l'Académie Impériale des Sciences de St.-Petersbourg*, 12, 417-418.
- 中村千賀（2015）トガクシソウ－3つの名前をもつ花，戸隠地質化石博物館，8p.
- Yatabe R. (1891) New or little known plants of Japan. 植物学雑誌，5，281-284.
- 矢澤米三郎・河野齡蔵（1916）日本アルプス登山案内，岩波書店，323p.